

# 源氏物語と高麗紙

吉野政治

## 1

その起源は明らかではないが、奈良時代には紙漉の技術も染紙の技術も既に高度なものとなっていた。正倉院には種々の原料で抄かれた行政文書が大量に残されており、黄檗で染められた経典や紺紙や紫紙に書写された経典が伝存し、紅白茶黄赤緑藍の濃淡さまざまな色相の紙も未使用の状態で大量に保存されている<sup>(1)</sup>。

平安時代になると、仏教や行政の世界に限られていた紙は日常生活の中でも用いられるようになった。紙屋院に設けられた官営の紙漉場では剛柔厚薄さまざまな紙が抄かれ、二藍、朽葉、海松、木賊、紅梅、萌黄など交ぜ染めの中間色や同色を薄く濃く繊細な色調に染め上げた色紙も作り出された<sup>(2)</sup>。それら多種多

様な紙は、公私の違いにより、用途の違いによって使い分けられているが、平安貴族の私的な紙の用い方は、後宮に仕えた女性たちが書いた物語が具体的に教えてくれる。特に『源氏物語』の作者は物語の場面の雰囲気や登場人物の心情を表わすためにも、紙の質や色について詳しい説明を加えておられ<sup>(3)</sup>、それぞれの場合に用いられる紙が細かな心配りによって選ばれたものであったことを窺うことができる。例えば光源氏は、紫の上の手習いに、古歌の「知らねどもむさしのといへばかこたれぬよしやさこそはむらさきのゆゑ」を踏まえて、「武蔵野といへばかこたれぬ」と「紫の紙」に書き（若紫巻）、齋宮の母御息所の没後には、齋宮に宛てて「ふりみだれひまなき空になき人のあまがけるらむ宿ぞかなしき」と「空色の曇らはしき（紙）」に書いた（霽標巻）。こうした一枚の色紙を選ぶときに

もなされた気配りは、色好みの平安貴族たちもまた同様であったであろう。

## 2

ところで、当時用いられていた紙は国産だけではなく、舶来の唐紙<sup>(4)</sup>と高麗紙もあった。ただ、仮名文学では唐紙は『宇津保物語』『源氏物語』『枕草子』『榮華物語』『大鏡』『古今著聞集』などにも見られるが、高麗紙は『源氏物語』に次の三例が見られるだけである（引用は新日本古典文学大系本に拠る。ただし、表記を変えたところがある）。

①又の日の昼つかた、岡辺に御文つかはす。心はづかしきさまなめるを、「中く、かゝる物の隅にぞ、思ひのほかなる事も、籠もるべかめる」と、心づかひし給ひて、高麗の胡桃色の紙に、えならず引きつくるひて、

をちこちも知らぬ雲井にながめわびかすめし宿の木ず

ゑをぞとふ

思ふには

とばかりやありけん。

（明石）

②まだ書かぬ草子どもつくり加へて、表紙、紐などいみじくせさせ給ふ。「兵部卿の宮、左衛門の督などにもせん。みづから一よろひは書くべし。けしきばみいますかれども、え書きならべじや」と、我ほめしを給ふ。

墨、筆ならびなく選り出でて、例のところく、たゞならぬ御消息あれば、人びと難きことにおぼして、かへさひ申し給ふもあれば、まめやかにきこえ給ふ。高麗の紙の薄様だちたるが、せめてなまめかしきを、「このもの好みする若き人ぐ心みん」とて、

（梅枝）

③書き給へる草子どもも、隠し給ふべきならねば、取り出で給ひて、かたみに御覽す。唐の紙のいとすくみたるに、草書き給へる、すぐれてめでたしと、見給ふに、高麗の紙の肌こまかに、和うなつかしきが、色など花やかならでなまめきたるに、おほどかなる女手の、うるはしう心とめて書き給へる、たとふべき方なし。見給ふ人の涙さへ、水荳に流れ添ふ心地して、飽く世あるまじきに、またこの紙屋の色紙の色あひ花やかなるに、乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書き給へる、見どころ限りなし。

（梅枝）

①の「高麗の胡桃色の紙」は、光源氏がまだ会ったことのない明石の上に宛てられた手紙の用箋である。明石の入道の話から明石の上の教養や人柄などを推測して特に選ばれたものなのであるが、入道からの「娘は手紙を貰ったことのみ余りのかたじけなさに御文を見ることができないでいる」という返事に、源氏は今度は「いといたうなよびたる（たいそうしなやかで柔らかい）薄様」を用いて明石の上に手紙を書いた。「薄様」とは『和名類聚抄』卷十三の文書具条に「斐薄紙」とあり、斐紙（後に雁皮紙と呼ばれる）の薄様を特に言うようである。「斐」は「美しいさま。明らかなさま」を意味し、その薄様は透き通るほど薄く、滑らかで光沢のある表面を持つ。『台記』『兵範記』『後二条師通記』等に「美紙」と呼ばれているものもこれであろうとされる。<sup>5)</sup>平安朝の日記文学などに散見する「薄様」は多く懸想文に用いられている。ちなみに明石の入道から光源氏への手紙は「陸奥国紙」が用いられている。

明石の上に対して書かれた最初の手紙に用いられた「高麗の紙」は「胡桃色」であった。「胡桃紙」は早く正倉院文書（天平九年三月付文書など）にも見える。この「胡桃紙」は天平六年文書の「造紙合一万二百十八張」の項に「胡桃染」「胡桃皮」

と見え、上村六郎氏は「胡桃の樹皮や葉の染料の煎じ汁と灰汁とを使って、一種の茶色（木蘭色）の染紙を作ったものであろう<sup>6)</sup>と推測している。ただし、染色の仕方には漉染めと後染めの二つがある。漉染めは紙料と一緒に染料を入れて漉き、後染は出来上がった紙に上から色を塗っていく。後者には浸染めと刷毛染めとがある。天平勝宝四年「経紙出納帳」に「深胡桃紙」「中胡桃紙」「浅胡桃紙」とあるのは漉染めではないようである。布とは異なり、紙の場合は何度も液中に浸すことは不可能だからである。『源氏物語』の注釈書『河海抄』（四辻善成著、貞治六年〔1306〕成）では「裏はしろくして表は薄香の色なる紙也」と説明し（「かう（香）の色」は黄色を帯びた薄紅色）、『仙源抄』（長慶天皇著、弘和元年〔981〕成）では「うすかう色なる紙なり。面はしろき也」と説明する。これによれば染液を平たい容器に入れ、紙の片面だけを浸すか刷毛に染液を着けて紙に掃いたものであろう。『河海抄』と『仙源抄』では紙の裏表の捉え方が逆になっているのも、あるいはそれを示唆するのであろう。旧大系本は「胡桃色は、薄い丁字色（黄色に赤味のある色）。この紙はやや厚いので、裏が白くなっているのもある」と説明している。高麗の胡桃色の紙も同様の方法で染め

られたものと思われる。

②の「高麗の紙の薄様だちたる」の「…だちたる」は「…めいた。…風にみえる」の意であるが、「薄様」という語を原義によつて理解すれば、高麗紙の少し薄く漉かれたものとも、また慣用にしたがつて理解すれば、斐紙（雁皮紙系）の「薄様」のような高麗紙とも理解できる。おそらく前者に理解すべきものと思われるが、いずれにせよ、紫式部はこれを「せめてなまめかしき」（非常に上品な）と評している。

③の高麗紙については後に詳述するが、「おほどかなる女手」の文字が書かれたものであり、「草」の文字で書かれた紙、また「乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書き給へる」紙屋紙と並べられている。「色など花やかならず、なまめきたる」色は①と同じく胡桃色であろうか。たしかに黄色に赤味のある色はなまめかしいが、花やかとは言えないようである。

### 3

前節に見たように『源氏物語』には「高麗紙」の紙質と色が詳細に説明されている。この舶来紙は平安貴族にとつてどのような存在であつたのだろうか。

和紙研究の開拓者の一人であり、特に日本における手漉和紙の「歴史地理的研究」に大きな功績を残した寿岳文章氏は、平安中期の貴族達の外国紙に対する評価について次のように述べられている（『源氏物語』に見えてゐる紙』『和紙研究』第四号、昭和十四年十二月発行）。傍線を引いたのは後に引用者が特に取り上げる箇所である。

（前略）平安中期では国産の紙が最も多く用ひられ、唐紙の輸入もかなりの程度で行はれてゐたが、高麗の紙はさほど用いられなかつたと見ても大過はあるまいと思われる。服飾、香料、薬品などの供給を唐土に仰ぎ、「いまめかしき」生活の要素の中には異国への憧憬が多量に交つてゐた平安時代の上流人士が、紙に関する限り、特別の場合のほかさほど異国に頼らうとしなかつたばかりか、「唐の紙は脆くて」（寿岳氏が便宜的に付けられている用例番号は略す。以下同じ）と舶来の品にきびしい批判をさへ加へてゐるのは、わが国の製紙事業が、その点で先輩国たる唐や高麗のそれに比べて決して劣つてゐなかつた為である。

寿岳氏は続けて次のように言われる。

特別の場合とは何であらう。それは「梅枝」の巻に見えて

るるやうな、甚だ高貴な内容にふさわしい装幀で行ふに際し、物自体の工芸的な価値よりも、めづらかさの限りをつくしたと云ふ意識のうちに、当時の貴族が満足を感じる場合などである。装幀の材料として唐の紙と本朝の紙といづれがすぐれてゐるかは問題でなく、何と言つても唐や高麗の紙の方がめづらしいからそれを効果的に使はうとするのである。だから、当時の貴族は、なべてならぬ唐の紙の入つた厨子を用意し、いと懐かしう、芳しき香に深く染み匂つてゐるのを取り出し、或はその「いとすくみたるに、草に書き」などして得意がつたのである。その色は、『源氏物語』のもの凡てを拾ふと、そら色、浅緑、白、縹、浅縹などであるが、黄色もあつたことは『大鏡』（中）から類推されるし、『玉蔓』にいふ「唐の色紙」の種類はもつと豊富だつたと想像される。が、唐の紙の感触や紙品については「脆くて」と「すくみたる」以外、不思議にも日本紀の局は何の批評も試みてゐない。「香ばしい」とあるにしてもそれは紙自身の性格ではなく、香料の薫染めによつて生じた外附的の属性で、ひとり唐の紙には限らぬ。そして次のように結論づけている。

少しがちすぎた想像かもしれないが、当時船載された唐の紙は、その唐物なるが故に意識される「今めかしさ」が好奇憧憬の中心概念であつて、紙そのものにはさしたる特色もなかつたのではあるまいか。

寿岳氏が最後に「紙そのものにはさしたる特色もなかつたのではあるまいか」と言われているのは、平安貴族は、そのように考えていたであらう、ということにならうが、はたして彼らは唐紙（また高麗紙）をそのように見ていたのであろうか。寿岳氏がそのように推測されたのは、『源氏物語』が唐紙を「脆くて」また「すくみたる」と評していることによる。

唐紙が「脆い」と評されているのは、光源氏が女三の宮の毎日の持仏供養に用いる経の用紙を特に命じて紙屋院に漉かせた次の場面である。

さては、阿弥陀経、唐の紙は脆くて、朝夕の御手ならしにもいかゞとて、紙屋の人を召して、ことに仰言賜ひて、心ことにすかせ給へるに、  
(鈴虫)

唐紙は脆いという評価は後世に至るまで変わらない。例えば貝原益軒の『大和本草』（宝永六年〔1709〕刊）に「本邦ノ内諸州ニ各製スル者皆厚薄広狭短長不レ同。名産多シ。朝鮮製ハ

本邦ノ製ニ似テツヨシ。中華ノ紙ハ脆弱ナリ」と見え、佐藤信淵の「経済要録」(文政十年〔1799〕刊)にも「漢土及印度諸国の紙は其外見は雅なりと雖も、性質甚だ脆く破れ易く云々」と見え、柳宗悦も「支那は大きな国であるから一概には云へぬが、大体から云つて強靱なもの少なく、竹紙風な品質の弱いものが多い。之に比べると朝鮮のものは楮紙一式で甚だ強く又美しい」(「工藝」八十七号、昭和十三年四月発行、p.26)と言っている。<sup>(7)</sup>光源氏の判断は用途に応じて考慮された客観的な唐紙の紙質によるものであった。

唐紙が「すくみたる」と評されているのは、前掲の梅枝<sup>③</sup>の箇所にある。この場面は光源氏が明石の姫君の入内用に用意した草子を見せる場面である。光源氏は唐紙には「草」(草仮名あるいは真名の草書体か)で書き、高麗紙には「女文字」(ひらがな)で書いた。紙屋紙には「みだれたる草の歌を、筆にまかせてみだれ書い」たというのは「一首の和歌をさまざまに変化をさせた草仮名で書い」たというのであろう。源氏はそれぞれの紙質に合わせて書体を選んだのである。高麗紙は「はだこまかに、なごうなつかしきが、色など花やかならず、なまめきたる」ものであり、紙屋紙も「色あひ花やかなる」ものであり、

そして唐紙は「いとすくみたる」紙であった。そして、それぞれの紙に書かれた書は「いとすぐれて、めでたし」「たとふべき方なし」「見所限りなし」という見事なものであった。

問題となるのは、この「すくみたる」の意味である。

「すくむ」の語根スクは、スクスクシ(堅く真つ直ぐで、しなやかな弾力性に欠けている意)、スクヨカ(硬くしつかりしているさま)のスクと同根であり(『岩波古語辞典』)、硬・強の意と考えられる。したがって、「すくみたる紙」とは「硬質の紙」あるいは「固い感じがする(紙)」「小学館『古語大辞典』という意味と理解できる。『河海抄』に「こはこはしい」と訳しているのも同じ理解である(コハゴハシは「堅くてしなやかさが無い」の意)。前述のような場面においては、この「唐の紙のいとすくみたるに」という句は否定的な意味あいでは書かれているとは考えられない。旧の古典文学大系本は三条西実隆筆青表紙証本を底本とするが、これには「唐の紙の、いとすぐれたるに」となっている。その頭注によると、伝二条為明筆本も同文であるという。さらに池田亀鑑編著の『源氏物語大成』の校異篇によると、桃園文庫蔵本には「すくよか成に」とある由である。こうした異文があることも、「すくみたる」は

肯定的な意味で用いられていることを示すようである。<sup>(8)</sup>

本居宣長(『玉かつま』巻十四「紙の事」)が「皇国には国々より出る紙の品いと多くて、厚きうすき、強きやはらかなる、さまざまあげもつくしがたけれど、物書くにはなほ唐の紙に及ものなし、人はいかがおほゆるむ知らず、我はしかおほゆるなり」と言っているが、硬質の紙は特に強い筆跡で書くには適している。賢木巻に「(源氏は)唐の紙ども入れさせ給ひつる御厨子あけさせ給ひて、なべてならぬを選び出でつ、筆なども心ことにひきつくり給へる気色、艶なるを」とあるが、この梅枝巻で用いられた唐紙も同様の目的で選出されたのであろうと想像される。草仮名あるいは真名の草書体の文字を書くためには「いとすくみたる」唐紙は、より適した紙である。梅枝巻の「いとすくみたる」は肯定的な意味で用いられていると考えるべきであろう。

脆い特質を持つ唐紙であつても、優れた唐紙は他に代えがたい魅力を持つものである。高麗紙に対しても前掲のように梅枝の巻には違例の評価が与えられている。彼らは「紙そのものにはさしたる特色もない」ものの、珍しい舶来品だということだけで使用したのではなく、国産紙とは異なる紙質や色合いを愛

し、それぞれに相応しい用途で用いたものと考えたい。王朝文学から窺える彼らの紙に対する感覚は極めて豊かで繊細であるように思われる。

梅枝の巻(③)に見える「こゝの紙屋の色紙」の「こ」とは日本のことであるが、当時の紙屋院で漉かれた紙は「唐や高麗のそれに比べて決して劣つてゐなかつた」ことは確かであろう。しかし、その優秀さを強調しすぎると、ややもすれば舶来紙に対する平安貴族たちの紙に対する評価や愛着を矮小化してしまうことにならう。

いずれにせよ、『源氏物語』では唐紙の感触や紙品についての詳しい言及は、この二箇所しかないのは確かである。しかし、その少なさは国産紙についても陸奥紙について「厚肥えたる」(末摘花)「ふくよかなる」(胡蝶)「黄ばみ厚肥えたる」(若菜上)などに見えるくらいであり、「唐紙」に対してだけのことではない。紫式部は紙質より色相の描写に多く注意を払つたといふことであろう。したがって、注目されるのは、僅か三例しか現われない高麗紙のすべてに「胡桃色の紙」(①)とその色を記すばかりでなく、「薄様だちたるが、せちになまめかしき」(②)、「はだこまかに、なごうなつかしきが、色など花やかな

らず、なまめきたる」(③)と紙質についても詳しい説明が加えられていることである。寿岳氏自身もまた先の引用に続けてその違例さを指摘している。

それにひきくらべ、高麗の紙は、わづか三度しか言及されてゐないにも拘わらず、その性格は実にはつきりと描き出されてゐる。即ちそれは、膚目が細かで、なごやかな柔軟性をもち、懐かしさをそゝり、いろはあまり華やかではなく、しかもどこかなまめかしい所があり、その上におほやかな女手で麗しう心をこめて書くときは、譬へやうもなくよく似合ふ紙であつた。その華やかでない色とは、恐らく胡桃いろであつただろう。それは今も尚朝鮮の紙が残してゐるいかにも朝鮮らしい伝統の色である。だから、「高麗だちたるがせて艶かしき」つゝ、ましい紙であつた。朝鮮の紙の特色を、これ以上適確に表現すること不可能と思はれるほど心にくい描破である。

## 4

『源氏物語』の「高麗紙」に対する批評は以上のとおりであるが、高麗紙の実体はどのようなものだったのだろうか。

中国の製紙史研究に比べ、朝鮮のそれは日本ではあまり行われていないようである。特に古代の高麗紙についての確かな史料に基づいた歴史的研究は極めて少ない。本稿の筆者が参考にすることができたのは、浜口良光「朝鮮の紙」(『工藝』百十四号、昭和十八年十一月発行)と奈良勇「朝鮮紙」(調査資料第二十四輯、平壤商工会議所、昭和十九年刊)、朴英璇「韓紙の歴史」(『和紙文化研究』第十二号、平成十六年十一月発行)などである。これらの論考に引用されている史料は高麗朝時代(918-1392)以降のものであるが、「高麗紙」と呼ばれた紙は後々まで高麗時代の製法を保つて漉かれていたようであり、<sup>(9)</sup>『源氏物語』の「高麗の紙」の面影を窺うことはできよう。

浜口氏の論文から本稿に参考になる箇所を次に掲げる(表記の仕方を一部改めた。引用には後に特に取り上げる箇所は傍線を付す。以下同じ)。

A 高麗紙に関する記録としては『芝峰類説』の「裨紙」に云ふ「温州の罽紙は潔白堅滑にして高麗紙に類す」と。又云ふ「高麗蜜紙を歳貢す、書卷に多く用ひて襯と爲す」と。蓋し襯は粧貼、其の紙品たるや堅厚なるを以てなり。按ずるに罽紙と云ふ者は、其の賦役に罽するを以

ての故に名く」とあるが、有名で高麗紙の優秀さを裏書きしてゐる。(中略)

由來文房の具は支那、朝鮮共に最も尚ぶ処である。紙が文房の具として尚ばれ、亦書籍印行の必需品としてその要求が時と共に加はり、李朝時代に至つては各地で各種のものが製造された。李圭景の文に、

李朝の紙類は成虚白倪(李朝成宗時の人約四百年前)の『備齋叢話』に之を詳論す。世宇の朝、造紙署を設け、表箋咨文紙を作り、又印書諸色紙を作る。其の品一ならず、藁精紙・柳木紙・蕙以紙・麻骨紙・純倭紙あり。皆其の精を極む。史籍に印する所亦好し。今は則ち只藁精・柳葉の両色有るのみ。金思齋安国、苔紙を朝に進む。此れ思齋躬めて製し以て呈するものなり。(中略)

又『芝峰類説』に曰ふ、

我国(朝鮮)の鏡面紙、竹葉紙は中朝(支那)の人甚だ之を珍とす。(中略)按ずるに、『宛委余篇』云ふ、今世重んずる所の高麗繭紙は、蓋し紙品堅韌なるを以ての故に、之を繭紙と謂ふと。

李朝時代の紙に関する記録は尚かなりあるが、何れも

源氏物語と高麗紙

紙の良質なること、種類の多いことなどが挙げられてあつて、製紙の盛んであつたことを裏書きしてゐる。

引用されている『芝峰類説』は李朝宣祖の時代(1568-1608)の書。それに収録されている『稗紙』(書誌未詳)に高麗紙は「潔白堅滑」とあり、『宛委余篇』(書誌未詳)にも「高麗繭紙は、蓋し紙品堅韌なるを以て故に、之を繭紙と謂ふ」とある。『芝峰類説』に引用されている『稗紙』に「高麗蛮紙を歳貢す」とあることも注目される(後述)。

奈良氏の著書には次のような史書が引用されている(返り点を私に付す)<sup>(10)</sup>。

#### B 『鷄林志』

高麗楮紙光白可愛、号曰穉紙。

C 『保晚齋叢書』の中の『攷事十二集』卷十一「紙品高下」の条

宋人論「諸国紙品」、必以「高麗紙」為「上」、此特見「当时貢幣之紙」而云「然也」。若「今造紙署之咨文紙、平康之雪花紙、全州南原之扇子紙、簡壯紙、油注紙、油苞、上天下之所「稀有」者。且其苔紙、竹清紙、又合荆南、古今之産並有之。但東尚質、紙名多不若「中国」之文飾」。

我國之紙、最堅初。可レ施<sub>二</sub>搥搗之功<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>益平滑<sub>一</sub>、而他國紙、不<sub>レ</sub>能然<sub>二</sub>耳<sub>一</sub>。

搥紙之法、乾紙一張外漉湿一張沓<sub>レ</sub>上、如<sub>レ</sub>此重疊沓起、以<sub>二</sub>三百張<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>塚、放平<sub>二</sub>正案上<sub>一</sub>、又<sub>レ</sub>平面板<sub>レ</sub>压在<sub>レ</sub>上、以<sub>二</sub>大石<sub>一</sub>压<sub>レ</sub>之、經<sub>二</sub>一伏時<sub>一</sub>、上下乾湿皆勻、於<sub>二</sub>石上<sub>一</sub>勻搥<sub>二</sub>三百<sub>一</sub>下、皆着実、於<sub>二</sub>百張内<sub>一</sub>、將<sub>二</sub>五十張<sub>一</sub>乾乾、却<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>湿者五十張、乾湿相間、沓了、再<sub>レ</sub>勻搥<sub>二</sub>三百<sub>一</sub>下、依<sub>レ</sub>上晒乾<sub>二</sub>一半<sub>一</sub>、又<sub>レ</sub>乾湿相間、沓了、如<sub>レ</sub>此三四次、直至<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>一張沾々<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>度、再<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>石碾<sub>二</sub>三四次<sub>一</sub>、倒下搥勻、直至<sub>二</sub>光滑<sub>一</sub>如<sub>二</sub>油紙<sub>一</sub>。

D

『林園經濟志』中の「怡雲志」卷四「文具雅製下」の条、高麗有<sub>二</sub>綿繭紙<sub>一</sub>、色白如<sub>レ</sub>綾、堅紉如<sub>レ</sub>帛、用<sub>二</sub>以書写<sub>一</sub>、發<sub>レ</sub>墨可<sub>レ</sub>愛。

(遵生八箋)

紙以<sub>二</sub>治受<sub>一</sub>墨光善谷<sub>レ</sub>筆態為<sub>レ</sub>貴、不<sub>レ</sub>必<sub>二</sub>以堅紉<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>裂為<sub>レ</sub>德、徐渭謂<sub>二</sub>高麗紙不<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>画<sub>一</sub>。惟錢厚者稍佳、其不見可如此、不<sub>レ</sub>種則毛荒難<sub>レ</sub>写、搥鍊則紙面大硬、滑不<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>筆、堅不<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>墨。故不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>中国之佳<sub>一</sub>也。

(熱河日記)

中州人最重<sub>二</sub>東紙<sub>一</sub>、嘗見<sub>二</sub>周密<sub>一</sub>思陵書面記、紹興内府所

藏法書、画装標裁制<sub>一</sub>、其有<sub>二</sub>品第一<sub>一</sub>、其上等兩漢三國二王六朝隋唐君臣真蹟、及上中下等唐人真蹟、皆用<sub>二</sub>高麗紙<sub>一</sub>。彈次以下<sub>一</sub>、或用<sub>二</sub>蠲紙<sub>一</sub>、或用<sub>二</sub>揩光紙<sub>一</sub>。宋人之<sub>二</sub>宝<sub>一</sub>、重高麗紙<sub>一</sub>、認為<sub>二</sub>天下第一<sub>一</sub>、此可<sub>レ</sub>徵矣。然今、東紙實甚匱劣、湘南之全州南原産者、素号<sub>二</sub>國中第一<sub>一</sub>、而亦患穢悍龜硬、以<sub>レ</sub>之模<sub>二</sub>印<sub>一</sub>、則卷軀太重、以<sub>レ</sub>之彈<sub>二</sub>書<sub>一</sub>、則勁健不<sub>レ</sub>便、卷舒、則母<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>紙蜀繭<sub>一</sub>、視<sub>二</sub>諸日本紙品<sub>一</sub>、亦無<sub>レ</sub>異<sub>二</sub>賦<sub>一</sub>、之於良、豈匠造之今不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>古而然耶、抑華人之貴<sub>レ</sub>之者、特以<sub>二</sub>外國産<sub>一</sub>而貴<sub>レ</sub>之耶。

(金華名耕讀記)

錢牧齋跋東刻柳、又有<sub>二</sub>繭紙<sub>一</sub>、堅緻之語<sub>一</sub>、然東人実不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>繭紙<sub>一</sub>為<sub>二</sub>何物<sub>一</sub>、何由得<sub>二</sub>搦印<sub>一</sub>書籍、高深甫遵生八箋亦云<sub>二</sub>高麗有<sub>二</sub>綿繭紙<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>見吾何等紙品<sub>一</sub>、而誤以<sub>二</sub>繭紙<sub>一</sub>稱<sub>レ</sub>之也。

(同右)

Bの「鷄林記」は宋代の著(書誌未詳。鷄林は新羅の別号)。この書によつて高麗紙の原料は楮であること、また白く光沢があつて「白種紙」と呼ばれていたことが分かる(引用の原文は「白種紙」であるが、「白種紙」の誤りであろう。「種」は玉に

似た石であり、「砥」は「うつ。たたく。つく」の意である)。「白砥紙」は新羅時代に始めて漉かれた紙であり、高麗時代を経て朝鮮後期まで漉かれた紙であると言う。また、中国で繭紙・蚕紙・綿繭紙などと呼ばれているのはこの紙であろうとされている。

Cの「保晩齋叢書」は徐命膺(717-1787)の編。この史料には「我国(朝鮮)の紙の堅紮で平滑であることは他国の紙が能くすることのできないものである。それは搥搗の功による」といったことが書かれている(「搥搗」は槌や砧で打つこと)。その「搥搗」について『攷事十二集』からの引用の後半部分に詳しく説明されている。漉き上げた紙の乾いたものと湿つたものとを重ねて叩く工程は、光沢があり堅紮で平滑であるという高麗紙の特徴に関わるようであるが、現在の韓紙ではこの工程はあまり行われないう(朴英璇「韓紙の歴史」)。

Dは徐有渠の編。『遵生八箋』は明代の高濂(高深甫)の著であり、「高麗に綿繭紙有り。色の白いことは綾のようであり、堅紮なことは帛のようである。書写に用いれば良く墨色を発し、愛すべき紙である」とある。『熱河日記』は朴趾源の著。これに引用されている徐潤は明の人で詩文書画を良くした人である

が、「高麗紙は絵を描くには適當ではない。搥練しないものは毛羽立って筆蹟の様態をよく表わせないが、堅く叩きすぎると筆が滑りやすく、堅いものは墨を吸わない」などと言っているのは、書画家としての彼の好みによる感想であるが、高麗紙のものに対する評価はCと同じと言える。

以上、限られた史料からではあるが、高麗紙は「堅韌」(堅くしなやかで強い)「堅緻」(堅くきめが細かい)で、平滑で光沢があり、繭や帛(絹)や綾に譬えられるものであったことが分かる。これを『源氏物語』の説明に照らし合わせると、「高麗の紙の、はだこまかに」「なごうなつかしき」(柔軟で親しみのある)とあるのと一致する。また、「薄様だちたる」とあるのも、漉き方によって紙は厚くも薄くもなるものであり、これも齟齬しないと考えて良い。実際に浜口良光氏は前掲論文で、高麗盛期のものと推定される『高麗本戒律』にはさまざまの厚さの紙が用いられていることを紹介している。

之は大形の本であるが、其の紙質は稀に見る美しい而も堅牢なものである。面白いことには一冊の本にも、数葉毎に紙質を異にし、紙の綴込みの方の末端に寄進者の名を印刷している。各地方の産紙を寄進したものと思はれる。その

中には薄葉のものもあれば厚手のものもあり、中間のものもある。光沢あり、密度よく、何とも云はれないよいものである。恐らく高麗盛期のものであらう。

ただ、「源氏物語」には「高麗の胡桃色の紙」が現われるが、前掲の史料には白いだけで説明されている（A「潔白」、B「光白」、D「色白」）。これらは生紙（漉いたままの紙）の特徴について説明したものであり、染紙や加工紙については説明されていないからであらう。また、Aが引用する李圭景の文には李朝の世宇（太宗）の時に、「造紙署」が設けられ、「諸色紙」が作られたとあるが、これは特殊な色紙について言ったものようである。すでに新羅時代の写経用紙には藍染めの紺紙が用いられており、『青野漫輯』巻一「勝国記事」には高麗高宗の時に公家や私家の奴隸たちが編成した奴隸軍の合図に黄色の紙が用いられたことが記されているという（朴英璇「韓紙の歴史」）。

## 5

ところで、平安朝の文学に現われる高麗の工芸品は、紙以外にも「高麗錦」「高麗笛」「高麗の幄」「高麗緑」がある。

沈の箱に浅香の下机、打敷は青丹の高麗の錦、足結の組、花足の心ばへなど、いまめかし。〔源氏物語〕総合

楼の天上には、鏡形・雲の形を織りたる高麗錦を張りたり。

〔宇津保物語〕楼の上・上

いみじく清らなる高麗の錦の袋にてある、取り渡すに、匂ひたる香、えならず。

〔宇津保物語〕楼の上・下

おとど……高麗笛とりいで給へり。いと上手におはすれは

いとおもしろう吹きたまふ。〔源氏物語〕末摘花

（嵯峨院は）高麗笛を好ませ給ふめるに、唐土の帝の御返

り賜ひけるに賜はせたる高麗笛を奉らむ。

〔宇津保物語〕楼の上・下

高麗の幄十一間を鱗のごとく打ちたり。

〔宇津保物語〕吹上・下

畳は 高麗緑。また黄なる地の緑。〔枕草子〕三四一

ことさらに、御座といふ畳のさまにて、高麗などいときよらなり。

〔枕草子〕二八九

このうち、「高麗錦」は既に『萬葉集』に見え、紐に対する称め言葉としても用いられていることは注目される（『萬葉集』14・三四六五、16・三七九一など）。高麗物は古くから憧れの

対象であったのであろう。これらのものも平安貴族達にとつては、現代の我々が高麗の青磁や李朝の白磁を愛するように心惹かれたものと思われる。可能ならば手に入れたらと思うていたはずである。ましてや前節に列挙した史料Dに「西漢三国二王六朝隋唐君臣真蹟、及上中下等唐人真蹟、皆用高麗紙擘云々」「宋人論諸国紙品、必以高麗紙為上」とあるように、中国では高麗紙は唐紙より高く評価されていた。唐の文化に憧れていた平安貴族たちが、中国の文人たちが最上の紙と評価している高麗紙に関心を持たなかつたとは思われない。しかし、文学作品には「唐紙」は多く現われるのに、「高麗紙」は『源氏物語』にしか現われない。それは何故だろう。

当時の日本と高麗との関係は良好ではなかつたようである。『日本紀略』天延二年（九七四）閏十月三十日条には「高麗邦交易使」が高麗馬その他を持って参入したことが記されているが、『小右記』長徳三年（九九七）六月十二、十三日条には高麗朝廷から送られてきた牒状に諸問題があるとして、日本朝廷は返牒せず、要害を警固するなどの対応をしている。<sup>13</sup>このような困難な政治的關係に加えて、高麗紙に関する次のような特殊な事情もあつたようである。

Aの『芝峰類説』に引用されている『稗紙』に「高麗蚕紙を歳貢す」とあり、Cの『攷事十二集』に「貢幣之紙」とあつたように、高麗紙は宗主国である中国の歴代の王朝に大量に貢献されていた。例えば『高麗史』文宗三十四年（1080）七月条には「大紙二千幅」が宋に貢上されたとある。高麗紙の「大紙」の大きさは未詳であるが、太田南畝の『平日閑話』によると、当時の「大唐紙」は「四尺七寸×二間余」また「一丈二尺×四尺八寸五分」である（およそ四メ弱×一、六メ弱程）。「幅」は、「帖」と同じく一定の枚数をひとまとめにして数える単位として用いられているのであろう。ただ、何枚を一帖とするかは紙の種類によつて異なる。『御堂閔白記』（長和五年七月十日条）に貢物として献上されたことが記されている日本の「檀紙」の場合には二十四枚であり、これに準じれば二千幅（帖）は四万三千枚となる。延喜年間における日本の紙屋院で一年間に漉かれた量は二万枚（張）であり、全官庁の年間使用量は十万八千枚（張）である（浜口良光『和紙史考』『工藝』百十六号）。

こうした両国間の政治的關係や高麗紙の特殊事情によつて、当時の日本では高麗紙は望んでも容易には手に入れることができなかつたものと思われる。ただ、憶測を逞しくすれば、光源

氏のモデルの一人とされる藤原道長ほどの財力と権力と持った者が手を尽くせば手に入れることはできたであろう。<sup>(15)</sup>道長自身の好みでなくとも娘彰子が望めば道長はそれを手に入れたであろう。そして、彰子に仕え、道長と特別な関係にあったとも考えられている紫式部はそれを見ることができたのではなかったか。ただ、道長の兄である道隆の娘中宮定子に仕えた清少納言の『枕草子』には「唐鏡」「唐錦」「唐綾」「唐の薄物」などと共に「唐の紙」は現われるものの、「高麗紙」は現われない。寿岳氏は清女の好みの問題であろうと言われているが、あるいは道隆（もしくは定子）の好みであったのかもしれない。

## 〔注〕

- (1) 正倉院文書には「色紙」「五色紙」「黄紙」「赤紙」「紫紙」「紅紙」「標紙」「藍紙」「黄褐紙」「浅黄紙」など色相を表わす紙の名や「蘇芳紙」「刈安紙」「比佐宜染(紙)」「蓮葉染(紙)」「垣津幡染(紙)」「胡桃染(紙)」「椽染(紙)」など染料名を表わす紙の名が見える。前田千守氏の調査によると、染紙の数は二六五万余枚になるという(『日本色彩文化史』岩波書店、一九六〇年刊一六一頁)。

(2) 養老令では図書寮に四人の「装潢手」が定められている

〔装潢〕とは紙を切り揃えたり染めたりすること。『令義解』「装潢」注「截治曰装。染色曰潢」。また、横井時冬著『日本工業史』第三編第五章第五款に「かの一条天皇のころより色紙を好みて用ゐることになりしかば、これにより色紙の製法いよいよ精しくなりぬるは世に伝ふるが如し」とあるが、平安時代の和紙裝飾加工の高さを示す西本願寺本蔵三十六人家集は一条天皇の頃(985-1011)に作られたものである。平安時代の物語文学に見られる消息の料紙については前田千守著『むらさきぐさ』(河出書房、昭和三十一年刊)第一部第十章に詳しい調査がなされているが、『源氏物語』には次の染紙が現われる。

- (3)
- 白 「白き紙」(末摘花・賢木・総合・若菜上)「白き色紙」(行幸・橋姫・宿木・浮舟)「白き唐紙」(須磨)
- 「白き薄様」(蜜・真木柱)「白き赤きなど掲焉なる枚」(梅枝)
- 赤 「赤き色紙」(浮舟)「赤き紙の、映るばかり色深き」(紅葉賀)「白き赤きなど掲焉なる枚」(梅枝)
- 紅 「紅の紙」(紅梅)「紅の薄様」(浮舟)
- 青 「青き紙」(絵合)「青き色紙」(常夏)「青摺りの紙」(少女)
- 空色 「空色の紙」(滯標)「空の色したる唐の紙」(葵)
- 青鈍 「青鈍の紙」(滯標・権)「濃き青鈍の紙」(葵・若菜)

下)

緑 「緑の薄様」(少女・浮舟)

浅緑 「浅緑の薄様」(若菜下) 「唐の浅緑の紙」(賢木・梅

枝)

縹 「縹の唐の紙」(絵合) 「唐の縹の紙」(玉蔓)

紫 「紫の紙」(若紫・末摘花・少女・椎本) 「紫の薄様」

(野分・浮舟)

赤紫 「赤紫の表紙」(絵合)

黒 「黒き紙」(椎本)

檜皮色 「檜皮色の紙」(真木柱)

紅梅 「紅梅の色の紙」(梅枝)

胡桃色 「高麗の胡桃色の紙」(明石)

(4) カラ(唐)・カラクニ(唐国)は広く外国を意味することも

あるが、「唐紙」は中国の紙だけを言うようである。平安文学では宋の紙である。

(5) 小野晃嗣「中世に於ける製紙業と紙商業」(『歴史地理』第六

七巻第四号、昭和十一年四月発行。『日本産業発達史の研究』所収)。また、雁皮紙系の「鳥の子紙」について寺島良安の

『和漢三才図会』(正徳三年[1713]撰)は「肌滑らかにして書き易く、性堅耐久、紙王と謂ふべきものか」と言う。いず

れにせよ源氏の明石の上への手紙は二通ともに「紙つかひの美しげなる文」(『讃岐典侍日記』)であったということにな

ろう。

(6) 上村六郎「正倉院宝物の染紙について」(正倉院事務所編集

『正倉院の紙』日本経済新聞社、昭和四十五年刊、pp.123-

也)。前田千寸『日本染色文化史』も「胡桃樹皮の灰汁媒染に

よる褐色はその中に仄かな紫色を含み、他の樹皮や柴染の灰

汁媒染による黄褐色に比して著しい特徴があつて美しい」

(四七九頁)と言う。

(7) 中国紙の脆さは原料と漉き方に因る。宋以降の原料は竹・木

綿・麦・稲藁であるが、これらは叩解されて紙料となつた後

に更に細断されることがある(久米康生著『造纸の源流』雄

松堂出版、昭和六十年刊、p.25)。これは日本の奈良時代で

も同じであつたようだが、楮と雁皮を主原料とした平安時代

以降は、叩解された後の紙料は裁断されることはない。また、

中国の「溜漉き」は「パルプ状にした紙料を、簀ですくい上

げ、漉桁の上桁の中に溜め、あるいは揺り動かして水を切り、

紙の層を作る」(広辞苑)が、平安時代以降の日本で一般的

になつた「流漉き」は「パルプ状にした紙料に植物性粘液

(ネリ)を混入した紙料液を竹製・萱製の簀ですくい上げ、

全体を揺り動かしながら紙層をつくり、数回のすくい上げで

厚さを調整したのち、表面の液とともに塵などを流し捨て

る」(同右)ものである。流漉きでは特に前後左右に振り動

かされる作業によつて、長い繊維が絡みあい、紙は薄くても

強靱な紙となる。

- (8) 新古典文学大系が「すくむ」を「縮む」の意としているのは誤りであろう。仮にその意とすれば、源氏は敢えてきわめて書きにくい紙を選んだことになるが、この場面において唐紙だけをそのような紙に設定する理由は考えられない。

- (9) 平塚運一「朝鮮紙と古代日本紙」『書窓』47、1987、6 発行)に言う。

家蔵の牛医方、馬医方は高麗時代(建文元年。李朝になった初めの年なれど彫版他高麗に行われしものならん)の刊本で荒い網のやうな繊維で、その微妙な肌合いは云ひ得ないものがある。高麗経の断簡がある。透かして見ると、叢雲のやうに繊維がみだれてゐる。正徳刊の三剛行実、成化刊行の十王経、皆古風な調子と厚さ薄さに、素朴な風情がある。斯うして、朝鮮の古い時代から、新しい時代へかけての紙を見ると、まるで、日本上代の紙と同じ心持を持つてゐる事が感じられる。朝鮮の紙の製法は、千年前も今も変わらないらしい。瓦の製法も、百済新羅時代も今日も同じことを続けてゐる朝鮮である。昔そのまゝの味がいろいろな方面に残つてゐると思ふ。

また、「高麗紙」という名も後世まで用いられている。例えば『大江俊充記』天和四年(1663)四月七日条に火事見舞いに「高麗紙一束」を贈つたという記事が見え(濱田徳太郎

『和紙つれづれ』昭和二十三年刊。p.19)、柳宗悦の雑誌『工藝』百十四号(昭和十八年十一月発行)の口絵に貼付されている朝鮮紙の見本十三種の中に「高麗状紙」がある。

- (10) 明らかな誤植は訂正した。その他にも不審な所があるが、原文を確かめることができず、そのままにしている(その箇所には返り点を付していない)。

- (11) 李朝が楮紙(紙幣)を復活させるために「造紙所」を設置したのは世宗王十五年(1455)である(『太宗実録』卷三十五、十五年七月条)。

- (12) 実際に道長の頃には唐紙は多く輸入されていた。当時の歌切れのほとんどは悉く唐紙である(内藤虎次郎「紙のはなし」、『工藝』二十八号、1933、4 発行)。

- (13) 以上、近藤剛著『日本高麗関係史』(八木書店、2019 年刊)に拠る。

- (14) 朝鮮総督府編『慶州郡』(昭和九年刊)には「製紙は(中略)既に新羅朝時代より発達し、新羅白唾紙と称する優良品を産出した。高麗朝より李朝に至り本郡の産紙は益々精良となり、これが為に貢物として支那に貢献せられて居た」とあるが、元も一度に十萬枚の紙を買入れたと伝えられているという(『中日新聞プラス』連載「尹大辰の韓流・深イイ話」。ただし、出典は未確認)。また、熙寧七年(一〇七四)には金漆の櫃二つに入られた高麗大紙二十幅が中国への高級進上品

として贈られたといったような記録も散見する（朴英璇「韓紙の歴史」）。

(15) 道長と唐物との関係については河添房江著『唐物の文化史』

（岩波新書）第三章「舶来の紙の手本」に詳しい。また、道長の「文化的才能」が卓越したものであったことは前田千寸『日本色彩文化史』第三篇第四章第三の一のイ、また『むらさきぐさ』第一部第十章に詳述されている。

#### 【付記】

長く本誌の編集長を務められている服部 匡教授は今年度を以て退職され、学究に専念されると聞く。謹みて蕪稿を呈し、教授の前途を祝す。